K240.2

2a

目錄

一　西洋文明の發祥……一
(一)　古代の西南アジヤ……一
(二)　ギリシヤ……二
(三)　ローマ……四
(四)　ギリシヤ・ローマの文化……六
二　歐洲社會の成立……八
(一)　ゲルマン民族の活動……八
(二)　封建制度とキリスト教の勢力……九
(三)　東歐の形勢……十三
(四)　十字軍とその影響……十五

昭和21年5月13日印刷　同日翻刻印刷
昭和21年5月17日發行　同日翻刻發行
[昭和21年5月17日　文部省檢査濟]

著作權所有

著作兼發行者　文部省
東京都豐島區西巢鴨三丁目二十四番地
翻刻發行者　中等學校教科書株式會社
代表者　加野庄吾
東京都千代田區神田一ツ橋二丁目十二番地
印刷者　大日本印刷株式會社
代表者　佐久間長壽

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION (DATE May 13, 1946)

一　西洋文明の發祥

(一)　古代の西南アジヤ

エジプト　今から約五千五百年前、先づナイル河の下流に、北は地中海から南は第一瀑布に亙る統一國家が成立した。以後三千年の間、國運盛衰のうちにも、獨自のエジプト文化を發達させた。その國王は、神の權化とあがめられて絶對權を振るひ、人々は、自然物殊に動物を神聖視し、厚く太陽を崇拜し、固く靈魂の不滅を信じた。かくて、豪壯な石造神殿やピラミッドのやうな巨大な記念物が營まれ、今なほその跡をとゞめてゐる。

エジプト人は、早くも一年三百六十五日の太陽曆を用ひた。この曆は、その後しばしば改められ、西洋曆の基となつたのである。また、かれらは、獨自の文字を發明し、これを表意と表音とに用ひて記錄を殘した。最近、エジプト文字や言語の研究が進んで、その記錄も讀めるやうになり、當時の日常生活のことまで判明するに至つた。

バビロニヤ　エジプトに統一王國が興つた頃、チグリス・ユーフラテス兩河地方は、多くの都市國家に分れてゐた。これら諸國家もまた、盛衰興亡して、今から約四千年前に、ハンムラビ王の統一が成り、バビロニヤ王國が出現すると、首府バビロンは、後世長く西南アジヤの政治・文化の中心となつた。殊に王の集成した法典は、ハンムラビ法典と稱せられ、世界最古の成文法として有名である。

バビロニヤは、商工業が盛んで、貨幣の使用も世界で最も古く、計數は六十進法によつた。今日用ひられてゐる時間や角度の計り方は、こゝに起原するのである。バビロニヤ人も、楔形文字を作つて表意と表音とに用ひ、多くの記錄を殘したので、エジプト同樣、これを通して、その日常生活をうかゞふことができる。

フェニキヤ　シリヤ地方は、古くフェニキヤと呼ばれ、その地中海沿岸に多くの都市國家が興つて、商工業が榮えた。しかも住民は、更に地中海岸の他地方にも植民して、ギリシヤ人やローマ人と對抗した。かれらは、早くから、エジプト・バビロニヤ兩文明

の影響を受け、やがて獨自の表音文字を發明し、後世に傳へた。卽ち、フェニキヤ文字は、ギリシヤ文字の起原となり、更にこれが改められて、今日のローマ字となつたのである。

ヘブライ　フェニキヤの南、パレスチナの地には、ヘブライ人が國を建てた。もと流浪の民であつたかれらは、この地に定住すると、唯一の神ヤーベを信仰し、みづからこの神に選ばれた民であると確信して、周圍の諸民族と抗爭し、つぶさに苦難をなめた。

ヘブライ人は、初め十二部族に分れてゐたが、やがて統一されて一王國となり、程なくイスラエル・ユダヤの二國に分裂し、ついでアッシリヤと新バビロニヤとに滅された。その後、ヘブライ人は、ペルシヤ王に許されて信仰を再興したが、後にローマのために追放されるに及んで、世界各地に離散し、ユダヤ人として今日に至つてゐる。

アッシリヤとペルシヤ　これら西南アジヤの諸地方を最初に統一したのが、アッシリヤ人である。アッシリヤは、もとバビロニヤ人の植民した土地であつたが、武力と商業とに秀でて強盛となり、獨立後、一時エジプトをも征服して、一大帝國を形成した。その後、周圍の諸民族に壓迫され、國内の反亂に苦しんで遂に亡びた。その領土は分裂して多くの國が興つた。

中でも、新バビロニヤは、最も強盛であつたが、その東方メジヤ國から新たにペルシヤが興つた。卽ち、その王キロスは、諸國を討つてペルシヤ帝國を建て、次代にはエジプトをも征服して、東境インドに達する廣大な地域を領有した。かくてペルシヤは、多くの異民族を包含しながら、よく中央集權の實を擧げ、國内の諸民族を融合して、西南アジヤ文明の統一を果した。

西南アジヤは、世界の中で、最も古く國家の統一や瓦解が繰り返された所で、政治はおほむね君主の專制であつた。一般に宗教が重んぜられたので、ゾラツストラ教・ユダヤ教・キリスト教・イスラム教などがこの地に生まれ、思想・學問なども特色をもつてゐた。

(二)　ギリシヤ

エーゲ文明　エーゲ海沿岸及びその中の多くの島々には、早くから西南アジヤの文化が傳はつたが、やがて、ギリシヤの植民地を壓迫し、遂にペルシヤとギリシヤの戰となつた（ペルシヤ戰役）。この東西民族の衝突に於いて、ギリシヤ人は、ペルシヤの進攻を擊退してはギリシヤに傳はり、ミケーネなどに新文化が開けた。

ホメロスの詩に歌はれてゐる物語は、この時代の末頃のことである。

都市國家の成立　その後、ギリシヤ人が新たに到來して、ミケーネ文化が亡びると、小アジヤの西岸地方やギリシヤには、純ギリシヤ風の文化が興つた。

ギリシヤ人は、初め多くの部族に分れ、國家らしいものをもたなかつたが、後には、かれらの間に、多くの都市國家が成立した。わが神武天皇の御代の少し前から、ギリシヤ人は、盛んに地中海沿岸の各地に植民して、自己の文物を傳へるとともに、大いに見聞を廣めて、自身の文化を向上させた。かくて、ギリシヤ本土の多くの都市國家の中では、アテネの發展が最も目ざましく、次にスパルタが、すぐれた國風を示した。

ペルシヤ戰役と覇者の隆替　ギリシヤ人が、小アジヤ西岸に發展した頃、ペルシヤはしだいに國土を廣め、武力と商業とに秀でて強盛となり、獨立後、一時エジプトをも征服して、一大帝國を形成した。その後、周圍の諸民族に壓迫され、國内の反亂に苦しんで遂に亡びた。その領土は分裂して多くの國が興つた。

中でも、新バビロニヤは、最も強盛であつたが、その東方メジヤ國から新たにペルシヤが興つた。卽ち、その王キロスは、諸國を討つてペルシヤ帝國を建て、次代にはエジプトをも征服して、東境インドに達する廣大な地域を領有した。かくてペルシヤは、多くの異民族を包含しながら、よく中央集權の實を擧げ、國内の諸民族を融合して、西南アジヤ文明の統一を果した。

西南アジヤは、世界の中で、最も古く國家の統一や瓦解が繰り返された所で、政治はおほむね君主の專制であつた。一般に宗教が重んぜられたので、ゾラツストラ教・ユダヤ教・キリスト教・イスラム教などがこの地に生まれ、思想・學問なども特色をもつてゐた。

(二)　ギリシヤ

エーゲ文明　エーゲ海沿岸及びその中の多くの島々には、早くから西南アジヤの文化が傳はつたが、やがて、ギリシヤの植民地を壓迫し、遂にペルシヤとギリシヤの戰となつた（ペルシヤ戰役）。この東西民族の衝突に於いて、ギリシヤ人は、ペルシヤの進攻を擊退してはギリシヤに傳はり、ミケーネなどに新文化が開けた。

ホメロスの詩に歌はれてゐる物語は、この時代の末頃のことである。

都市國家の成立　その後、ギリシヤ人が新たに到來して、ミケーネ文化が亡びると、小アジヤの西岸地方やギリシヤには、純ギリシヤ風の文化が興つた。

ギリシヤ人は、初め多くの部族に分れ、國家らしいものをもたなかつたが、後には、かれらの間に、多くの都市國家が成立した。わが神武天皇の御代の少し前から、ギリシヤ人は、盛んに地中海沿岸の各地に植民して、自己の文物を傳へるとともに、大いに見聞を廣めて、自身の文化を向上させた。かくて、ギリシヤ本土の多くの都市國家の中では、アテネの發展が最も目ざましく、次にスパルタが、すぐれた國風を示した。

ペルシヤ戰役と覇者の隆替　ギリシヤ人が、小アジヤ西岸に發展した頃、ペルシヤはしだいに國土を廣め

東西の文化を統一融合しようとする理想の實現はできなかつたが、死後やがてこれが實を結んだ。卽ち、その版圖は、エジプト・シリヤ・マケドニヤに三分したけれども、廣大な西南アジヤの諸地域には、ギリシヤ人が盛んに進出して都市を營み、ギリシヤ文化を傳へた。また、シリヤ・エジプトの諸王は、いはゆるヘリエント風の强力な君主政治を行なひ、東西の融和による國家の繁榮をはかつた。

かくて、西南アジヤ諸地域の文化は、著しくギリシヤ化するとともに、一面、ギリシヤ固有の文化もまた、東方文化の影響を受けて、いろ〳〵と變つた。これをヘレニズム文化といひ、アレクサンドルの死後約三百年間、地中海沿岸からアジヤ奥地まで、この文化が普及した。卽ち、東流したヘレニズム文化は、イラン地方にバクトリヤ文化、インドにガンダーラ美術を作り、その影響は、更に東方に及んだ。エジプトのアレクサンドリヤは、當時文化の大中心として榮えた。

(三)　ローマ

ローマの興起　古代のイタリヤ半島には、種々の民族が雜然と割據してゐたが、西曆紀元前三世紀初頭、ローマ人がほゞ半島を征服し、獨得の統御法で、わづかの間に、よく民族の統一と融和とを果した。しかもローマには、國初から貴族と平民との爭ひが激しかつたが、やがて兩者は法律及び政治上平等となり、市民は共和政治の實を擧げることができた。

その頃、北アフリカには、フェニキヤの植民地カルタゴがあり、西地中海の制海權を握り、富裕を誇つた。ローマは、これと約百二十年間、前後三回に亙つて戰を開き、遂に紀元前二世紀半頃にこれを滅した(ポエニ戰役)。その後、ローマは、更に東方の經營を始めて、先づ小アジヤを奪ひ、ついでギリシヤをも合はせた。

共和制の末期　ローマは、ポエニ戰役中、初めてシチリヤを屬州とした。その後、しだいに植民地を增して、廣大な植民地を四方に作つた。かくてローマ人は、將軍や知事、或は商人などになつて、それらの新開地に活動するやうになり、その結果、本國のローマに財貨が集り、奢侈・遊惰の風が流行し始めた。その上、よくない官吏と新興の富豪とが結んで私利をはかり、國家の中堅をなす小地主は、その壓迫を受けて、しだいに衰乏し、兩者の間に激しい爭ひさへ起つた。グラックス兄弟が出て、これを和解せしめようとしたが、ともに殺され、その爭ひは頂點に達した。

この時、平民黨からケーサルが現れ、同志と結んで政權を獲得し、ガリヤ(今のフランス地方)を經略してローマ文化を移し、ついで反對者を討ち、エジプト・小アジヤ・イスパニヤなどをも征服した。その名聲が大いにあがると、種々政治・軍事・社會上の改革を行なつたが、遂に反對派に殺された。かれは、このやうに政治家として傑出してゐた上に、文筆にも長じたローマ第一流の人物であつた。

帝政の盛時　ケーサルの養子オクタビヤヌスは、父の志を繼いで反對者を討ち、エジプトを征服してアウグスツス(尊嚴者の意)の尊號を受け、文武の顯職を一身に集めた。かくて、共和制は名ばかりとなつたので、世にこれ以後を帝政時代といふ。なほかれは、廣大なローマ領の防備を固め、軍政・內治を整へ、文藝をも保護・奬勵した。

その後約二百年間、國の內外はおほむね太平で、文化が普及して一般の敎養も高まり、物資は豐かで、版圖の擴張もまたその極に達した。こゝにローマ人は、世界統治・國家不滅の思想をいだくやうになり、後世長くその盛世をうたはれるに至つた。

ローマの衰亡　然るに、紀元二世紀末の頃から、ローマには暗愚な君主が相次ぎ、傭兵からなる軍隊は、無智・貪欲で橫暴を極め、勝手に皇帝の廢立を行なつたので、帝位は全く名ばかりとなつた。

かくて綱紀はゆるみ、財政が亂れて物價があがり、民衆は重稅に苦しんだ。植民地もまた、威令が行なはれず、おの〳〵獨立のかたちとなつた。且つ國民は、義勇奉公の念を忘れて安逸をむさぼり、古來の信仰はすたれて精神の安定を缺き、文化は衰へ、國民の體位は落ちて、人口も大いに減つた。その上、邊境では、ペルシヤと長期の戰を續け、またゲルマン人の侵入が、この頃やうやく激しくなつた。

そこでコンスタンチヌス大帝は、都をコンスタンチ

ノーブルに遷して國政を一新しようとしたが、時既におそく、やがて帝國は東西に二分し、西ローマ帝國は、わが雄略天皇の御代に亡び、東ローマ帝國が、新制の國家として、その命脈を保つた。

(四)　ギリシヤ・ローマの文化

ギリシヤ文化　ギリシヤでは、精神文化が著しく發達し、後世の歐米文化の母胎となつた。それは、先づイオニヤの地方に興り、極盛時代には、アテネがその中心であつた。

ギリシヤの思想　ギリシヤ人は、もと自然をあがめ、人間もこれに支配されるものと考へ、深く占ひや神託を信じた。その後、ゼウスを主とする十二神の信仰が興り、ギリシヤ神話が形成された。

かれらギリシヤ人は、夙に宇宙の根源を究めようとしたが、やがて人間そのものに深い關心をもち、人と神や國家との關係を考へるやうになつた。さうして、ソクラテスを初め、プラトン・アリストテレスらの有名な哲學者が次々に現れた。

ギリシヤの文藝　文藝では、先づ神話や傳説を内容とする敍事詩が早くから興り、ホメロスの詩篇の如きは、後世までもヨーロッパ人に愛誦され、教養の權となつた。ついで抒情詩も興り、アテネに於いては、悲劇や喜劇が神事に關して發達し、更にヘロドッスやツキジデスが出て、歴史を書き殘した。

また政治が公議によつて決せられたので、修辭や雄辯術も興つた。なほ美術では、神を擬人化するに至つて、神像や神殿が造られたが、中でもパルテノン神殿が名高く、その調和と均齊の美とを重んずる作風は、後世の歐洲美術に大きな影響を與へた。

ヘレニズム時代　いはゆるヘレニズム時代になるとアレクサンドリヤを中心として、學問、特に文獻學と自然科學とが盛んになつた。哲學と科學が分れて發達するやうになつたのも、この頃からである。

ローマの文化　ローマの繁榮をもたらしたものは、質實剛健なローマ市民であつた。その國土が膨脹するとともに、新領土の住民には、なるべく自治・自由を許したが、それでもローマの言語や風習は、おのづから新領

土殊に西歐に浸潤して、今なほその名殘りをとゞめてゐる。

ローマ人最大の創造は、大帝國を建設したことで、かれらは、これを維持、發展させるために全力を注いだ。したがつて、ローマの文化は、ギリシヤ文化の影響を受けながらも、これと發達の方向を異にし、實際的方面に特色を示して、よくその國粹を保つた。

即ち、ローマでは、治國の必要から、行政の制度が整ひ、特に法律が發達した。また都市が商業・貿易のために建設され、屯田地が、地方鎮撫のために、領内遠の地にも、道路・水道や公共建築物などが作られ、今なほその遺蹟に、往時の豪壯をしのばしめる。

ラテン語と文學　ローマでは、いはゆるラテン文學が、ギリシヤ文學の影響を受けて發達し、キケロの演説や論文などは、長くローマ人の教養の標となつた。アウグスッスの盛時には、建國以來の躍進的な發展を詩に歌ひ、歴史に記す風が行なはれ、ラテン文學の黄金時代を作つた。

ラテン語は、ローマの國語であつたが、帝國の滅亡後も、西歐で教養ある者の長く學ぶところとなつた。その方言化したものが、それ〴〵今日の伊・佛・西・葡などの國語となつたのである。簡潔を尚ぶローマ人の思想は、中世以後、このラテン語を通じて學ばれ、これが古代文化の傳達・普及を助けた功は大きい。

古典文化　歐米では、ギリシヤ・ローマの文化を、人間性の最もよく現れたもの、完成された美と眞理との根源を示したものと考へ、これを理想的なものとしてあがめる風があつた。即ち、ギリシヤ・ローマの文化は、古典文化と呼ばれ、キリスト教とともに、西洋文化の源泉となつてゐるのである。

キリスト教の起原と弘通　ローマには、古來ユピテルを主神とする信仰が行なはれ、領内では、各地にそれ〴〵の信仰が許されてゐたが、帝政時代には、國家の統治上、皇帝を神として崇拜させるに至つた。アウグスッスの頃、ユダヤにイエスが生まれ、偏狭固陋なユダヤ教を排し、神の慈愛と人類の相愛とを説くキリスト教を開いた。かれの死後、その教へは、教

亂の苦難に對する同情、門弟の熱心な布教及び社會の不安などにより、人々の歸依を得て、大いに各地に弘まつた。

ローマの諸帝は、多くこれを邪教として迫害したが、コンスタンチヌス大帝に至つて、治國の必要上、その信仰を公認し、ついで教義を一定した。かくてキリスト教は、正教としての基礎も定まり、その後長く榮えて、今なほ歐米の思想や文化に、著しい影響力をもつてゐる。

二　歐洲社會の成立

(一)ゲルマン民族の活動

中世の意義　西ローマ帝國の滅亡（四七六）から、東ローマ帝國の滅亡及び英佛百年戰役の終り（一四五三）まで、約一千年間は、これを世界の形勢から見ると、しばしばアジヤ諸民族が歐洲に進出して、大きな影響を與へた時であり、唐やサラセンは、當時の歐洲に比べて、遙かに優秀な文化をもつてゐた。

西歐では、ローマ帝國が亡びた後、ゲルマン民族が移動を續けて、混沌たる狀態にあつたが、やがてその中から、西歐が一つの社會として、徐々に固まつて行つた。それは、ローマの遺したラテン文化と、新しいゲルマン文化とが、更にキリスト教によつて融合されて行つたからである。

ゲルマン民族の移動　ゲルマン民族は、初め多くの部族に分れ、素朴な農牧生活を營んでゐた。ところが、四世紀の頃、ボルガ河流域のフン族（匈奴の餘黨）が西走して、隣接したゴート族を迫ひ拂ふに及び、これが歐洲の形勢に大きな波紋を投じた。即ち、こゝにゲルマン民族が陸續移動を開始し、防備のうすい西ローマ帝國内に奔入して、遂にこれを滅してしまつたのである。

かくて初期の民族大移動は、やがて一先づ終りを告げたが、その後九世紀の頃から、更に北歐のノルマン人が活動を始め、またもや歐洲の情勢を一變せしめるに至るのである。

大移動時代のゲルマン民族は、なほ未開の狀態にあつて、ローマ文化をこなす力なく、いづれもローマの古制にならつて建國した程度である。しかも、早くからローマ文化に接近した諸部族（ゴート・バンダル・ブルグンド等）の建てた國家は、やがてその跡を斷ち、比較的おそく建國して、ローマ文化の惠みに浴さなかつたもの（フランク・アングロサクソン）が、むしろしだいに有力になつて行つた。

フランク王國の發展　ゲルマン諸族の中でも、フランク族の發展は、後世に著しい影響を與へた。かれらは、早くからキリスト教に改宗してその勢力と結び、カロルス大帝に至つて、今の獨・佛・伊にまたがる大國を形成し、内政を改め、文運を興して、九世紀初頭、時のローマ法王から、西ローマ皇帝の冠を授けられた。

大帝の死後、その國は、東・西兩フランク王國（後の獨・佛）とイタリヤ王國とに三分したが、當時既に國語や一般の文化もほゞ分れて、後世の發展の基礎が定まり、獨・佛の對立もまたこゝに兆した。そのうち、ドイツは、多くの部族に分れて統一を缺き、フランスも地方が分裂して封建的傾向が著しく、イタリヤは風土や歷史の關係から、特別の發展を遂げて行つた。しかし、三國いづれも、まだ王權は甚だ振るはなかつた。

ノルマン人の活躍　ノルマン人は、もと北歐に住み、漂悍で航海に長じてゐた。かれらはわが平安初期から活動を始め、やがてフランスではノルマンディー公に封ぜられ、南伊ではナポリ王國を建て、更にその一部はロシヤにも國を建てた。イングランドでは、ローマ兵の撤退後、アングロサクソン族が國を建てたが、後にノルマンディー公ウィリヤムが、海を渡つてこれを征服し、大陸の血統や風習を移して、近代イギリスの基を築いた。

(二)封建制度とキリスト教の勢力

封建制度　封建制度は、ローマ帝國末期以來の社會の不安とゲルマン民族の古い習俗とから、西歐に發達した制度である。この制度は、十世紀までに、先づフランク王國に於いてその形體を整へ、その後、西歐の諸國に廣く行なはれ、約五百年間、歐洲社會の重要な地盤となつた。

封建制度は、カロルス大帝の死後、フランク王國が

分裂して後、公・伯などの地方官が支配地を部下に分ち與へて、主從關係を結んだことに始る。やがて國王は諸侯に領土を與へ、諸侯は更に武士に知行を分ち、武士は諸侯に忠誠を誓つて、常に武技を練り、有事の際には、王侯に從つて軍務に勵む習はしが成立した。

封建の社會　かくて諸侯は、おの〳〵要害の地に城郭を構へて分立・割據し、國王さへその領内に干渉することができず、中央集權の實はすたれて、地方分權の傾向が著しくなつた。また武士殊に騎士は、幼時から禮儀を學び、長じては武藝を練り、神をあがめ、婦人を敬ひ、弱者を憐む風があつた。世にこれを騎士道と稱する。

これら、武士以上の身分の者は貴族とされ、キリスト教の高級僧侶とともに、社會の上位にあつた。自然、商工業者や農民などの平民は、かれらにいたく壓迫され、殊に農民は、領主の土地を耕し、年貢を納めるほか、その勞役にも服せしめられた。

かうした社會では、身分や土地が世襲されるので一般に因習が重んぜられ、その上、世人は學事に疎く、信仰に厚かつた。よつて、キリスト教の勢力が大いに伸び、教會や修道院も、封建諸侯の如く、多數の武士や領民をもつてゐた。

キリスト教の勢力　キリスト教徒は、初め僧俗の區別さへなかつたが、布教の必要から、やうやく僧侶が生まれ、教會が組織され、五つの本山が成立した。教會は、信仰の中心であつたばかりでなく、僧侶が學識を備へ、よく社會救濟の事業にも盡くしたので、人々はこれを敬ひ、私事にまでその指圖を受けた。また信徒が、罪滅しのために巡禮を行なひ、莫大な財産を寄進したので、教會は廣大な土地と、豐富な財力とを所有し、その地位は、王侯に匹敵するに至つた。したがつて世の中もろ〳〵のことが、いづれも宗教の影響を受けた。

先づ美術方面では、信徒の寄附によつて、大伽藍が盛んに建立され、そこにロマネスク風やゴシック風の莊嚴な建築が見られ、繪畫や彫刻なども、これとともに發達した。學問もまた、キリスト教に關するものが諸學術の最高に位するものと考へられた。しかし、かかる宗教萬能の世には、一面、種々の弊害が伴なつて

起つた。

ローマ法王　本山のうちでは、ローマとコンスタンチノープルとが、東西に對立してその勢力を競つた。殊にローマ本山の管長は、やがて法王と呼ばれ、名僧が次々に出てゲルマン人の教化に成功し、フランク王から土地の寄進を受け（法王領の起原）、カロルス大帝には、西ローマ皇帝の帝冠を授けた。

ところが、これに先立ち東ローマ皇帝は、キリスト教當時の習はしである偶像の信仰を嚴禁したので、法王はこれに反對し、フランク王と結んで、遂に東ローマ帝國と袂を別つた。かくてキリスト教會は、法王に從ふローマ正教と東ローマ皇帝に從ふギリシャ正教とに分れることとなつた。

法王は、このやうに、有力な王侯と結んでその地歩を固めるとともに、教義を一定し、管下の教會を嚴しく統制したので、その威望はやうやく高まつた。更に俗界に對する威令をも強化するため、王侯の政治に干渉し、「神の休戰」と稱しては戰爭を中止せしめ、或は破門を以つてこれを脅したが、王侯はその壓制をどうすることもできなかつた。

神聖ローマ帝國　この頃、ドイツ王オットー一世は、英明で治績が大いにあがり、また法王を助けてイタリヤの内亂を鎭めたので、法王から神聖ローマ帝國の帝冠を受け、且つイタリヤの國王をも兼ねた。ここにドイツ王は、歷代皇帝の資格を得、古代ローマ皇帝の繼承者を以つてみづから任じたが、その世界統一の思想は、やがて法王の支配と衝突するに至つた。法王グレゴリウス七世が、教會を肅正して、その地位の向上をはかるとともに、法王の選擧に皇帝の關係することを排して、僧侶任免の權を帝王から奪つた際、ドイツ皇帝ハインリッヒ四世が、これと爭つて破門され、罪を謝してやうやく許されたことの如き、その例である。

その後も皇帝と法王との紛爭はしば〳〵起りその度ごとに法王權がます〳〵伸張して、十二、三世紀には、その絶頂に達した。インノケンチウス三世の如きは、獨・佛の國王を操り、イングランド王ジョンを破門して、これを屈服せしめたほどである。かの十字軍の起つたのも、かゝる法王の絶對權力の現れにほかならない。

(三)　東歐の形勢

東ローマ帝國　東ローマ帝國では、ユスチニヤヌス皇帝が、六世紀初めに、古代ローマを復興しようとして西方に出兵し、また新たにローマ法典を編纂せしめるなど、國威の伸展をはかつた。しかし、その後グルマン・スラブ諸民族の侵入を受け、ペルシヤやサラセン人にも攻められて、國威は振るはなかつた。しかも、皇帝は、歴代專制政治を行なひ、ギリシヤ正教の首長として、政教の大權を一身に集めたが、宮廷の紛爭が相次ぎ、帝權は强大でなかつた。また東ローマ帝國では、偶像の禮拜を禁じたが、宗論が盛んに行なはれたので、ローマ教會に於けるが如き統制を見ることはできなかつた。

文化は一般に、古代ローマの傳統よりも、ヘレニズムの流れを汲み、西南アジヤ文化の影響を受けて、獨得のビザンチン文化を發達せしめた。美術など莊嚴華麗な趣を示し、首都コンスタンチノープルが、その中心であつた。その文物は、早くから東歐に傳はり、更に十字軍の頃からは、西方にも傳はつて、それ〴〵文化の發達に寄與した。

スラブ民族の活動　スラブ民族は、グルマン民族とほゞ同じ頃、フン族に壓迫され、カルパチヤ山麓の原住地から移動を始めた。中でも、東北に移つたロシヤ人は、やがてスウェーデンのノルマン人リューリクのもとに、ノブゴロードに王國を建て、ついで南方に發展してキエフに都し、ローマ帝國の文物や、ギリシヤ正教を取り入れた。かれらは、後に蒙古人に征服され、約二百五十年間、キプチャク汗國に屬した。やがて、モスコー公國が興ると、イワン三世が東ローマ帝國滅亡後のギリシヤ正教の保護者となり、ついでキプチャク汗國から獨立し、イワン四世に至つて、皇帝（ツァール）と稱し、領土を廣めた。

一方、西進したスラブ民族は、ドイツの東方に分布し、ポーランドやボヘミヤ王國を建てた。十世紀頃から、その地には、ローマ正教が行なはれ、西歐の文物が取り入れられて、ロシヤと異なる發達ぶりが見られた。またスラブ民族の一派は、ローマ帝國領内にも侵入し、バルカン半島に發展した。この一派は、一時アジヤ系のブルガール族に從へられながらも、やがてこれと同化し、十三世紀に至つて大いに榮えたが、その後セルビヤ人などとともに、トルコ人に征服されるに至つた。

アジヤ民族の歐洲進出　歐洲の中世約一千年は、アジヤの諸民族が亞歐に亙つて進出活動を繰り返した時代である。その間歐洲では、先づフン族がグルマン民族を追つて西進し、やがて同族のアバールが、ドナウ河の中流地方に國を建て、同じ頃ボルガ河流域のブルガール族は、ドナウの下流地方に移住した。

七世紀の頃に、イスラム教を奉ずるサラセン人が西アジヤに興り、東西に大發展を遂げて北阿をも從へ、やがてイスパニヤのグルマン民族の國（西ゴート王國）を滅し、サラセン帝國を建てたことは、既に學んだところである。かれらは更に北進して、フランク王國を侵したこともあり、また一部は南伊に據り、地中海の制海權を握つたこともある。かくて古代ローマ帝國の故地は、西歐諸國と、東ローマ帝國と、サラセン帝國の西半とに三分したわけである。

八世紀の頃から、ウラル山麓のフィン族が、北露からスウェーデンの北部に廣まり、今のフィンランドの基を作つた。更に同族のマジヤール族が西進し、一時、南ドイツまで進出したが、ドイツ王オットー一世に破られて後、前進をやめてドナウ河の中流地方に定住し、西歐文明を取つて、後のハンガリー國の基を建てた。

やがてトルコ民族の一派セルジュク族が西アジヤに進出し、キリスト教の聖地を占領して破紋を投じ、西歐に十字軍を起さしめた。

ついで蒙古人の西征が、はな〴〵しく開始される。かれらは、先づロシヤを滅し、ドイツ・ポーランドの武士軍をワールシュタットに破り、ハンガリーをなびかせ、西歐は一大危機に直面した。やがてキプチャク汗國が、亞歐にまたがつて建設されたのである。

更に十三世紀末には、トルコ民族の一派オスマン族が小アジヤに興り、後にチムールに敗れたこともあるが、やがて勢を回復してコンスタンチノープルを攻略し、東ローマ帝國を滅した。かくて、この地域に於け

る西洋古代の傳統は絶え、イスラム文化がこれに代ることとなつた。しかもトルコは、十六世紀初頃に、シリヤやエジプトをも合せ、ハンガリーの大部を奪取、ウィーンを攻圍したことがあり、その艦隊は地中海を制壓して、極盛時代を現出した。その後、トルコ帝國は、しだいに衰運に向かつたが、皇帝（スルタン）は、なほイスラムの宗主としての地位を保ち、バルカン半島を占めて、以後の歐洲政局に重大な役割を演じた。

（四）十字軍とその影響

十字軍　セルジューク＝トルコ族が、東ローマ帝國を脅し、シリヤ・パレスチナを征服すると、東ローマ皇帝は、異教徒の侵入を防ぐために、法王に援助を乞うた。しかも、聖地を巡禮する信徒が虐待されるに及んで、法王は貴族・僧侶を召集して、聖地回復の軍を起すことを宣言した。當時は、法王の權威の高い世であつたから、王侯・貴族はもとより、庶民までが、感激して從事を誓つた。こゝに十字軍の遠征が始る。

第一回の十字軍は、法王宣言の翌年に進發し、苦戰の後、やうやくイエルサレムを占領した。しかも、その際建てた王國が、やがて滅されると、その復興のために、相次いで遠征軍が派遣された。しかし當時は、行路がすこぶる困難の上に、統率にその人を得ず、數回の遠征も、結局悉く失敗に歸し、これが終了を見たのは、わが文永年間のことである。

十字軍の結果　十字軍は、前後七回、約二百年に亙り、一〇九六―一二七二獨・佛・英その他諸國の王侯から庶民までが、法王の命のまに〳〵出征したのであるから、これによつても、法王權が強大で、封建制のよく行なはれた時代の姿をうかゞふことができる。なほ、不成功に終つたこの遠征も、その影響するところがすこぶる大であつた。

卽ち、海陸の交通が開けた結果、西歐人はサラセンや東ローマ帝國の學藝を習得して、大いにその智能を進め、殊に十字軍の輸送に從事したイタリヤその他には都市が勃興し、歐洲の情勢が一變するに至つた。一方、宗教熱がおのづからさめて、法王の權威が疑はれるに至り、また甚大な生命・財産の犧牲、諸侯

58. 8. 31
文部省図書館局図書館資料室 受入